明治天皇と競馬

── 近代日本における馬概念の変容 ──

高　橋　一　友

1．はじめに

明治天皇（1852-1912）が生きた時代は我が国において最も劇的に馬の概念が変わる時代であった。幕末から明治初期にかけて乗合馬車、馬車鉄道、サーカス、馬芝居、近代競馬（洋式競馬）などが盛んに登場し、馬の役割も多様になった（日高・横田 1998; 秋永 2004）。これらはすべて居留外国人を中心とした西欧から伝来した文化であった。中でも近代競馬は日本の大衆文化を象徴するものの１つとして現在まで存続している。しかしながら、江戸時代まで馬はそれほど目立った存在ではなかった。明治維新以降、近代化が押し進まれる中でこれまで見えない存在であった馬が民衆の生活や政治外交、戦争の表舞台へと立ち現れて来る。農耕馬から活兵器としての軍馬への転換、在来馬からサラブレッドへの転換、時代に求められた競馬の隆盛、その中心的な役割を果たしたのが明治天皇であった。だが、明治天皇もまた江戸時代までは見えない存在であった。その意味では日本近代競馬の誕生は明治天皇の人生とも重なる。かつて天皇が競馬に翻弄された時代があった。それは紛れもない史実である。

さて、本稿でこれから論じていく内容は、いわゆる明治天皇論だとか明治天皇個人の性格や人格を問うものではない[1)]。また、近代的な君主による民衆に対する政治的圧力のみを述べるものでもない[2)]。１人の人間が近代という時代に振り回され、競馬というギャンブル[3)]の世界へと足を踏み入れざるを得なかった生々しい過去の記憶を呼び起こすものである。明治期、天皇は自由な存在ではなかった。少なくとも競馬場において天皇は見る存在であると同時に見られる存在でもあった。明治天皇は私生活ではほとんど在来馬に跨った[4)]。その一方で競馬場の中では在来馬は駆逐されるべき存在であった。以下では、明治天皇の生き抜いた激動の時代を背景に近代日本における馬概念の変容を考察する。

2．幕末から明治期の競馬

近代競馬はどのようにして我が国に受容されたのか。本章では幕末から明治期にかけての近代競馬の歴史を簡単に概観する[5)]。競馬は明治天皇が幼少期の頃に伝わり、やがてそれは国家の一大プロジェクトである軍馬育成やギャンブルの熱狂へと発展していく。

2.1　日本近代競馬の幕開け

日本近代競馬発祥の地は幕末の横浜である。これはアジアにおける欧米列強の進出とそれに伴う幕府による不平等条約締結と決して無縁ではない。我が国初の近代競馬開催は横浜開港翌年の万延元年（1860）9月であるが、正式に競馬番組が残っており規則や競走の詳細が分かる競馬開催は文久2年（1862）5月に横浜新田で行われたものである。それ以降は、イギリスの競馬関係者が斬り付けられた生麦事件を契機に、イギリス第20連隊駐屯地や居留外国人向けの射撃場兼練兵場などで競馬が行われた[6]。しかし、いずれも専用の競馬場ではなかった。そのため、居留外国人から競馬場建設の強い要望があり、慶応2年11月（1866年12月）に我が国初の洋式競馬場である根岸競馬場が建設され、翌年に同場で最初の競馬が施行された。開港に伴って日本にやってきた外国人によって競馬が持ち込まれたため、同じ開港場であった神戸でも明治元年（1868）に居留地で競馬が開催され、翌年には生田神社の隣に競馬場が建設された。

このように幕末の競馬は横浜や神戸などの外国人居留地を中心に発展した。また、この場は治外法権となり、居留外国人は洋式建築を建て駐屯軍に守られながら母国と変わらぬ生活を営んだ。

明治時代に入ると、競馬は明治新政府の欧化政策と深く関わりを持つようになり、東京でも東京招魂社（現・靖国神社）、三田育種場、陸軍戸山学校、上野不忍地などで競馬が開催されるようになった。特に、明治3年（1870）から開催された東京招魂社での競馬は、日本人（兵部省）主催による最初の競馬となった。また、明治天皇は明治12年（1879）に前アメリカ大統領グラント将軍を戸山競馬に招待し、その後も移転先である上野不忍池競馬の明治17年（1884）の初開催時に行幸している。当時、天皇の行幸は決して珍しいものではなかったが、天皇を頂点とする明治政府首脳は欧米の風俗や習慣を模倣することで、文明開化の進展ぶりを海外にアピールしたのである（日高・横田 1998: 5）。しかし、馬券（勝馬投票券）の発売が許可されていなかった初期の競馬は経営が困難になり、東京の競馬場は明治中頃までに姿を消した。その一方で、根岸競馬場は外国人中心の日本レースクラブが主催だったため、明治21年（1888）から馬券発売を開始しており、競馬は継続して行われた。

2.2　戦争と競馬

全国で競馬ブームが起こるのは、劣悪な日本馬（表1）が露呈された日清・日露戦争[7]を契機に政府が馬匹改良計画を立て、その費用確保のために馬券発売を黙許した明治38年（1905）以降である。北海道から九州まで全国16の競馬法人が認可（予定）され、関東でも6法人が公認された。最初に認可されたのは東京競馬会で、池上競馬場での同年秋の初開催は1万5千人余の入場者を集め、96万円を売り上げる盛況振りだった（現在の価値に換算すると約34億5千万円）。

しかしながら、本来は刑法で禁止されている賭博が黙許されているということで射幸心を煽り、一般庶民には手が出せない掛け金が飛び交い（高等公務員初任給が50円の時代に馬券は1枚5円）、この時期には競馬そのもののイメージも変わってしまった[8]。また、現在のような競走馬の生産体制は整備されていなかったため、競馬の規模が拡大すると馬の頭数確保が問題になり、

本来の目的は馬匹改良と言いながら出走馬は内国産馬と外国産馬が入り混じる種々雑多という状況であった。このような理由から競馬批判が高まり、政府は取締りを強化したものの一向に改善されず、馬券発売黙許から3年後の明治41年（1908）の新刑法施行に合わせて馬券発売が禁止された。それでもこの10年の間に馬産地の状況が一変したのは事実であり（表2）、また馬匹改良によって日露戦争における徴発馬にも僅かながら成果が見られたのである（表3）。

表1　日独仏軍馬比較表

区分、国	日本	ドイツ	フランス
騎兵乗馬の体高（m）	1.416	1.596	1.551
砲兵輓馬の体高（m）	1.422	1.626	1.575
速歩（m/ 分）	210	240	240
この速度で連続10kmの馳駈	不能	可能	可能
馳歩（m/ 分）	300	480	440
砲兵輓馬の体重に相当する輓曳力（kg）	328.8	478.8	478.8
実際の輓曳重量（kg）	413.9	373.8	398.9

原資料）明治26年陸軍、農商務両省合同馬匹現況調査要項。
出典：日本中央競馬会総務部調査課編（1969: 2）。

表2　馬産地における農・牧場数、馬飼養頭数

	明治31年（1898）		明治41年（1908）	
	農・牧場数	馬飼養頭数	農・牧場数	馬飼養頭数
石狩	3	43	56	1,018
後志	5	49	29	652
渡島	8	217	38	563
胆振	11	121	39	2,355
日高	20	928	30	1,733
十勝	5	283	74	4,373
釧路	5	700	70	2,895
根室	6	526	24	718
北見	9	368	179	3,575
留萌	—	—	49	1,169
千島	1	29	—	—
計	73	3,264	588	19,051

出典：神崎（1994: 28）を参考に作成。

表３　日清戦争及び日露戦争における徴発馬

徴発馬＼戦争		日清戦争	日露戦争
検査頭数		147,149	275,265
採用頭数		35,032（採用率 23.8%）	89,800（採用率 32.6%）
役種別	乗馬	7,010（20.0%）	19,363（21.6%）
	輓馬	9,134（26.1%）	36,503（40.6%）
	駄馬	18,888（53.9%）	33,934（37.8%）
体尺別	5.0 尺（151.5cm）以上	321（ 0.9%）	1,436（ 1.6%）
	4.9 尺（148.5cm）以上	1,044（ 3.0%）	3,862（ 4.3%）
	4.8 尺（145.4cm）以上	3,037（ 8.7%）	10,597（11.8%）
	4.7 尺（142.4cm）以上	7,001（20.0%）	19,524（21.7%）
	4.6 尺（139.4cm）以上	10,090（28.8%）	24,508（27.3%）
	4.5 尺（136.4cm）以上	8,493（24.2%）	20,021（22.3%）
	4.4 尺（133.3cm）以上	5,046（14.4%）	9,852（11.0%）

出典：武市（1999: 261）。

３．明治天皇と競馬

江戸期における天皇や朝廷は儀礼的権威に留まり、ほとんどの日本人にとって明治以降の近代を迎えるまで天皇や皇室の存在はあまり知られていなかった。それが国学思想や明治維新の激動を経て、近代国家の中心として権威付けられていく。一般に東アジアの後進的地域について開国の意味は、「自己を外つまり国際社会に開くと同時に、国際社会にたいして自己を国＝統一国家として画するという両面性が内包されている」（丸山 1961: 9）と言われる。そこには２つの要素があり、「一つは、その国が一個の統一的政治単位として、近代西欧国家を基盤に展開して来た国際社会にくみいれられる面であり、いま一つは、西洋文明の導入またはそれによる触発を通じて封建的な社会・政治体制が改革される面である」（金 1975: 10）。その意味において我が国の競馬事業の変遷は注目に値する。というのも明治新政府は欧化の象徴として近代競馬を導入したが、そもそも日本には伝統的な天皇による古式競馬[9] があり、それが近代化の歩みの中で、更新されるという現象が見られたからである[10]。もし我が国において天皇による競馬の習慣がなかったら、歴史はもっと違った展開を見せていたのかもしれない。

以下では、明治天皇による全国各地の競馬行幸を見ていく[11]。また、その際、ギャンブルが公に容認されていた根岸競馬とそれ以外の競馬場を切り離して検討する。なぜなら、根岸における天覧競馬と馬券（勝馬投票券）の発売にこそ現在に連なる日本近代競馬のルーツが隠されているのではないかと思われるからである。

3.1 明治天皇の競馬行幸

日本競馬史第2巻には「明治天皇の競馬天覧」として以下のように書かれている。

> 明治天皇は、馬にご趣味が深く、ことに馬術にご堪能であったことは、主馬寮職員の馬術専門の者までが感じ入っていたということである。このようであったので、競馬についてはしばしばご覧になられており、行幸年表その他の御記録を拝見すると、明治2年2月京都賀茂上下社に行幸になり競馬を天覧になられたのをはじめとして、吹上競馬は18回、戸山学校競馬は1回、横浜根岸競馬は14回、上野不忍池競馬は8回、三田育種場競馬は6回天覧になられており[12)]、ほかに地方行幸の節に鹿児島、広島、三里塚、青森、札幌等で合計15回ご覧になっている。（日本競馬史編纂委員会編 1967: 597）

このように明治天皇の競馬行幸は全国各地で少なくとも50回以上行われた。こうした明治初期における近代競馬の様子は漫画雑誌や浮世絵にも描かれている（日高・横田 1998）。特に上野不忍池競馬の浮世絵では軍服姿の天皇とそれを囲い込む皇后や随従女官たちの姿が和装から洋装に変わった時期も捉えられている。皇后が洋服を奨励したのは明治19年（1886）であり、これは鹿鳴館時代における欧化政策の1つであった[13)]。

明治天皇自身は、欧米諸国の馬と比較して著しく劣っている我が国の在来馬について馬匹改良の必要性を重視した。そのため各競馬場に何度も足を運び、競馬を奨励する意味で御下賜品や御下賜金を授与し、優勝馬と馬主など競馬に携わる関係者の栄誉を称えた。これは英王室の競馬への取り組みを参考にしたものだったが、政府首脳は「ミカド」（Mikado）というネームバリューを利用して内外への大きな影響を期待したと考えられている[14)]。実際、明治32年（1899）の春、「日英通商航海条約など平等条約の実施に漕ぎつけたのを祝うかのように行幸されたのが明治天皇の根岸天覧競馬の最後になっていることなどが、そうした見方を生む根拠となっている」（馬の博物館編 1995: 53）という。

そこで以下ではまず根岸競馬を除いた天皇の競馬行幸を見ていく。

（1）吹上御苑の競馬

明治天皇は当初から軍人・華族への馬術奨励に熱心であった。吹上御苑では明治8年（1875）に初めて競馬が開催され、明治13年（1880）から春と秋、午前の乗馬会と午後の競馬会が定例化され、明治17年（1884）の秋開催まで続けられた。馬場は宮城（皇居）西の丸に円形に近い約738メートルであった。吹上競馬規則によれば、原則として3頭によるレースが中心であり、皇居内厩舎に用意された競馬服の着用も義務付けられ、他馬の進路妨害などによる降着制度のような細かい規則も整っていた。

本競馬出場の長岡中将講演要旨から当時の競馬の雰囲気と明治天皇の自然な姿を垣間見ることが出来る。

明治14年5月26日に吹上御苑におきまして将校の競馬の天覧がございました。もっとも、それより前に数回御催しになりましたが、長岡が御召に与りましたのはこの日をもって初めといたします。当時われわれ将校間の乗馬術の下手なことは実にお話しにならないほどでありました。陛下がこれに御着眼遊ばされまして御奨励遊ばされましたということは、将来における馬術の進歩の上に非常なる良成績をあげたことと考えます。［中略］ちょうどその時でございましたが、他の連中の競馬のときに騎手は途中でみな落馬してしまいました。日記を捜しましたが見当たらないのでその姓名を申し兼ねますが、気の利いた若い士官がありまして、その若い士官一人で“マラソン競走”をやって勝った。そうして決勝点に入ると手をあげて勝ったと叫びました。陛下はこれを御覧遊ばしてお笑いになりました。元来競馬の御下賜品でありますから今日の如く理屈をいいますれば頂戴はできないのでございましょうが、やはり士官も何か頂戴いたしました。（日本競馬史編纂委員会編 1967: 612-613）

このように吹上御苑における競馬は和気あいあいとしたものであった。当時の馬は改良されていない在来馬が多く、騎手の技術の低さばかりではなく馬の方にも課題があった。馬を操作出来ず、全員が落馬した。その中で若い1人の士官が機転を利かせた実に微笑ましいエピソードである。

（2）戸山学校競馬

陸軍戸山学校は、明治6年（1873）に開校した。明治12年（1879）6月、アメリカ合衆国前大統領であるグラント将軍が来日。明治政府にとって国家元首を経験した外国貴賓を迎えることは今回が初めてのことであり、それゆえ2か月余りの将軍の滞在期間、政府は様々な歓待行事を行った。その1つとして戸山競馬が企図された。競馬場の馬場は楕円形で1周は約1280メートル、開催日は8月20日とし、陸軍卿西郷従道の名でグラント将軍に招待状が出された。当日は明治天皇とグラント将軍一行、宮家、旧大名、政府高官などが競馬を観覧し、また催し物として日本古来の槍術、剣術、流鏑馬などが行われた。戸山競馬場はグラント将軍の歓待用に作られたが、将軍が帰国したのち明治12年（1879）11月30日に共同競馬会社によって第1回戸山競馬が開催され、明治17年（1884）まで続けられた。

（3）上野不忍池競馬

共同競馬会社は、戸山が辺鄙で交通が不便であったため、上野不忍池に競馬場を移設することに決めた。明治17年（1884）11月1日、御殿造りの優雅なスタンドに明治天皇を迎えて、競馬が華々しく開催された。この日は政府高官や財界人が多く集い、鹿鳴館と並び、欧化政策を象徴する一大イベントとなった。その煌びやかな光景を当時の新聞は次のように紹介している。

正面の高楼に菊章の御紋の幕を張り、御簾をかかげて金屏風を打まわし錦の卓布の眩くも拝

まるるは玉座にやあらん。左右の高楼を貴顕の食堂とす。馬見所の右後に婦人装飾室あり、花卉草木にて粧えり。それが前面を菊花壇とす。黄白爛熳と咲乱れていと清らかなるは、嬋姸たる婦人達の顔とその美を争うよと思われていとおかし。御出門は兼ねて正午と仰出されたり。今は間もなく着御なるべしと一同は庭前に立ちて聖駕を迎え奉りしに、聖上には定め玉いし御順路を経させ給い零時五十分着御ありけり。御陪乗は徳大寺侍従長、供奉は伊藤宮内卿杉二等出仕を始め侍従侍医の方々にぞ候わる。馬見所の前にて御下車あり。社長小松宮殿下の御先導にて直ちに玉座につかせ給い、この間楽人は楽を奏し弁天の境内よりは二十一発の煙火を打揚げて聖駕を祝し奉れり。有栖川、伏見、北白川宮を始め、山縣、西郷、山田、福岡、松方、井上、川村の各参議、各国公使その他貴顕紳士も多く陪観せらる。（日本競馬史編纂委員会編 1967: 634）

こうした政策は春秋 2 回を定期として明治 25 年（1892）まで続けられた。また明治天皇は明治 23 年（1890）、上野で行われた第 3 回内国勧業博覧会に出席し、博覧会出品の馬匹 130 余頭を見て、その中の 28 頭を選んで洋鞍、和鞍数番の試乗をご覧になった。馬匹にたいして深い関心のあった天皇は大変機嫌が良く、色々な質問をし、見物を終えてから附属の競馬を最後まで観戦した。

しかしながら、共同競馬会社は馬券を発売できなかったため、政府・陸軍の協力も限界に達し、経営難のため明治 26 年（1893）に解散した。

（4）三田育種場競馬

江戸時代の旧薩摩屋敷跡にできた三田勧業局育種場では、明治 10 年（1877）、大久保利通内務卿の尽力によって競馬が始められた。明治 12 年（1879）に 1 周 1100 メートルの常設の馬場が完成し、12 月に初開催。翌年には、興農競馬会社が設立され、毎年春と秋に洋式競馬が施行された。また、三田育種場では和鞍による古式競馬も行われていた。三田には天皇が積極的に訪れ、多くの上流貴族も集った。けれども、この競馬もまた馬券を発売することができなかったため、明治 18 年（1885）に開催が終了した。

（5）地方競馬

明治天皇の地方競馬行幸は多岐に渡る。地方競馬は神社などにおいて奉納や余興のために開催された祭典競馬を基礎にしたものも多い。天皇は明治初期に東北、下総、札幌、広島など各地の競馬を見て回った。中でも明治 14 年（1881）8 月 31 日の札幌巡幸は著名であり、現在の北海道における競馬産業の発展と競馬人気にも少なからず影響を与えている。

また、こうした天皇の地方行幸は競馬に限らずとも多くの研究が行われている（多木 1988; T. フジタニ 1994; 原 2001）。しかし、こうした研究は理想的な君主像の演出に重点が置かれており、純粋に娯楽を楽しむ等身大の天皇の姿は描かれていない。

表４　幕末から明治中期における主な競馬

名称	開催	現在地
根岸競馬	慶応２年12月６日（1867年１月11日）～ 昭和17年（1942）10月18日	神奈川県横浜市中区根岸台
神戸競馬	明治２年（1869）11月12日～ 明治７年（1874）11月20日	兵庫県神戸市中央区中山手通１丁目
招魂社競馬	明治３年（1870）９月23日～ 明治31年（1898）11月５日	東京都千代田区九段北２丁目
三田育種場競馬	明治12年（1879）12月20日～ 明治18年（1885）11月16日	東京都港区芝３丁目
戸山学校競馬	明治12年（1879）８月20日～ 明治17年（1884）４月28日	東京都新宿区大久保
上野不忍池競馬	明治17年（1884）11月１日～ 明治25年（1892）11月20日	東京都台東区上野公園

出典：日高・横田（1998）を参考に作成。

3.2　明治天皇と根岸競馬

先に記した通り、根岸競馬場は日本初の本格的な洋式競馬場として、慶応２年（1866）に完成した。初競馬は翌年のことで、それから昭和17年（1942）秋の開催までの約80年間、ほぼ毎年春と秋に競馬が施行され、我が国における近代競馬の中心的役割を果たした。根岸競馬場は日本の法律が適用されない居留地にあった。そのため、国内法で禁止されているギャンブルが、当初から公然と行なわれていた[15)]。

明治13年（1880）４月、欧米の上流人士のみならず、我が国の宮家・政府要人・財界人らが入会した日本レースクラブが発足すると、同クラブ主催による競馬（明治13年根岸春季）が初開催された。明治天皇は根岸競馬場における競馬を奨励するため優勝賞品（金銀銅象嵌銅製花瓶一対）を初めて下賜され、天皇賞のルーツ「Mikado's Vase Race（第３日５R天皇花瓶競走）」が実施された。この年以降、根岸競馬にはほぼ毎年、明治天皇から宮内省を通じて何らかの賞品が下賜され、それは他の競馬開催においても施行された。

明治21年（1888）秋季になると、主催者である日本レースクラブが１枚１ドルで馬券を売り出したため、よりいっそう競馬熱が高まり、根岸競馬は盛況の一途を辿っていった。

居留地としての借用期限（明治32年）が切れた後も、根岸では賭博が禁止されることもなく、またクラブが自粛することもなかった。それは、根岸競馬を主催する日本レースクラブ会頭が同盟列強国のイギリス大使であり、運営自体が列強国の外国人中心だったからである。こうした馬券売上による成功は、それまで経済力のある内外の会員と明治政府の援助に頼っていたレースクラブに貯蓄をもたらし、洋式競馬界の盟主としての根岸の立場を保証することになった。

その一方で馬券発売を行わない根岸以外の競馬は経済的基盤を確保できるはずもなく、また過

度な欧化政策を推進したことによって、庶民の欧化熱が著しく冷え切ったため、首都圏の競馬場は明治 32 年（1899）全滅状態、馬場振興の活気も完全に消え失せた。この時点において、ただ 1 つ残ったのが根岸競馬であった。

この根岸に明治天皇は計 13 回行幸した。その模様の一部が以下である。

> 明治天皇は、よほど競馬がお好きであった。春秋の横浜根岸競馬場へは、前後 18 回（※ 実際は 13 回）も行幸になった。横浜じゅうは、ロンドン市民がダービーに熱するみたいな他愛なさと国際色に雑闘する。鹵簿（※ 明治天皇の行列）はたしかオープンの3頭立て馬車で、道幅せまい相沢の貧民街も通ってゆく。その両側に、ぼくら小学生も立ち並んだことがある。みんなで紙旗を打振るのが、鹵簿の車輪やお体にも触れるほどだった。白い手袋とニコニコしたお顔が、小学生や貧民街の人々や競馬ファンにこたえて行かれた。ああしたオープンな陛下の姿は、以後、絶対に庶民の眼から遠ざかった。思い出すと、その日のみは、陛下も、ファンのおひとりだった。明治天皇が、わけても民情に通じておられたのも、偶然ではない。（吉川 1983: 265 ※引用者）

馬券が本格的に発売された明治 21 年（1888）秋季以降、明治天皇は 5 回根岸に行幸している。最後の天覧競馬は明治 32 年（1899）5 月 9 日であるが、この数回の天覧競馬が後の競馬事業に及ぼした影響は大きい。競馬は「スポーツとゲームとギャンブルが渾然一体となった心の高まり」（長島　1988： i）と言われる。しかし、競馬の本質はギャンブルに他ならない。根岸において天皇が競馬を観覧することは同時に天皇がギャンブルを公に奨励することをも意味する。もし根岸がその他の競馬場と同様に馬券の発売を禁止していたなら、現在のような競馬体制が存在しなかった可能性が高い。馬は根岸において「天皇の競走馬」に至ったと言える[16]。

4．おわりに

上述したように本来なら条約改正により明治 32 年（1899）7 月、根岸競馬場も賭けが禁止されるはずだった。しかし、日英同盟が見込まれたため、イギリス人が主なメンバーである日本レースクラブが賭けを自粛することも、日本政府によって規制されることもなかった。そのため内地雑居後、初めての競馬開催は、一般市民にとっても公の賭博場となって異様な熱気に包まれることになった。明治 34 年（1901）春、サー・クラウド・マクスウェル・マクドナルドが会頭に就任した。彼はそれまで毎年のように続けられていた皇室からの下賜を正式に定例化するよう、英国大使館を通じて宮内省に働きかけた[17]。こうして誕生したのが帝室御賞典（天皇賞の前身）である。以後、本競走は春秋 2 回の根岸競馬での大レースとしてファンの人気を集めるようになった。

明治天皇が競馬場から姿を消した一方で、帝室御賞典がギャンブルを奨励する天皇像の姿を継承したのである。それは後の馬券発売禁止という冬の時代を耐え忍ぶ原動力ともなっていく。

註

1)　その類の作品は数多く発表されている。時代小説なども含めると枚挙に暇がない（山岡 1968; D. キーン 2001; 飛鳥井 1989; 笠原 2006 ほか）。

2)　この分野に関しても多くの先行研究がある（多木 1988; T. フジタニ 1994; 原 2001 ほか）。

3)　筆者による強調。本稿ではギャンブルの中に天皇賞があることを問題視している。

4)　明治天皇が生涯に渡って所有した御料馬は 38 頭で、そのほとんどが日本在来馬であった。16 歳の初騎乗の時の胡蝶号や 15 年近く大切にされた金華山号、最後の騎乗の初来号などいずれも在来馬であった。金華山号は気性が極めて鋭敏でしかも冷静沈着でものに動ぜず、明治天皇との巡幸のエピソードは多数残されている（日高 2005: 6）。

5)　幕末から明治期における日本競馬の歴史については次のような比較的新しい資料を参考にした（馬の博物館編 2009; 日本中央競馬会編 2005a; 秋永 2012, 2013）。

6)　生麦事件の結果、居留地には住民による義勇軍が組織された。こうした状況の中、幕府は英、仏両国の軍隊の横浜駐屯を認めるに至った（馬の博物館編 1995: 19–20）。

7)　明治 11 年（1878）にパリで開催された万国博覧会に我が国から宮内省厩に繋養されていた「岩手瓦毛」と「田代　青」の和種馬 2 頭が出陳された。両馬はヨーロッパ人の注目の的となり、強い取得希望者が殺到した。そのため博覧会終了時に日本に持ち帰ることができずにフランス政府に贈られることとなった。宮内省は我が国古来からの名馬を出陳したのだから現地人からの強い取得希望の殺到は、日本馬の優秀さの証明であることを疑わなかった。しかし、実態は、「馬に非ずして猛獣なり」、「我が欧州にては今より百五十年前まではこの種の馬を遺存せしが今は絶滅なり。是れ真に動物学上有益な研究資料なり」と評され、改良を施されていない世界の珍品種として注目されたからであった。なお、この 2 頭の馬はパリの動物園において天寿をまっとうしたとされる（武市 1999: 5）。

明治 33 年（1900）の北清事変（義和団事件）で「日本軍は、馬のような格好をした猛獣に乗っている」と列国軍から蔑まされると、政府は翌年に去勢法を発布、馬匹改良上不適格馬を去勢することにした。また、明治天皇の勅諚（天皇の仰せ）によって、日露戦争の最中に、国家的事業としての馬匹改良政策の検討が始められ、終戦後に馬政局の設立と馬政計画の策定が行われた。これにより、優秀な輸入洋種と在来和種との交配による雑種化が進められることとなった（武市 1999: 7, 66–73）。

天正 19 年（1591）、宣教師バルトリは『イエズス会史 アジア』のなかに、「アラビア馬は巨大であって、見事な体軀ならびに活発な性質と調教の結果特異な歩行をするのに比べれば、その後に続いた日本の馬は、矮小で余り優雅でなく、皇帝（秀吉）の厩の中の最良のものであっても、駄馬のようであった」と記録している（武市 1999: 35–36）。

日本在来馬の英訳は「Japanese Native Pony」である（日本ウマ科学会・ウマ用語集編集委員会編 2003: 81）。

8)　大江が競馬の熱狂と騒動についてさまざまなスキャンダルを取り扱っている。馬券黙許時代の狂騒が競馬のイメージを劇的に変えたとされる（大江 2005）。

9)　現在行われている競馬（「近代競馬」、「洋式競馬」）は近代になってヨーロッパの形式をもとにして作られたものであり、これと区別して日本古来の競馬は「古式競馬」、「和式競馬」と呼ばれている（日本中央競馬会編 1976: 59）。我が国では 8 世紀初め頃に「くらべうま」という文化が興ったとされる。『続日本紀』には、大宝元年（701）端午の日に、文武天皇が五位以上の臣に走馬をさせ、ご覧になったという記録が残されている（日本競馬史編纂委員会編 1966: 4）。また、「こうした競べ馬はもともと中国から武技のひとつとして伝えられたものであるが、日本にもたらされてからは五穀豊穣・天下泰平を占う儀式となった」（早坂 1989: 64）という。

10） 天皇賞は近代競馬の象徴として発展してきたが、現在では古代も含めた日本文化の象徴である。それは 1980 年代後半から 1990 年代にかけて日本中央競馬会（JRA = Japan Racing Association）が発行した天皇賞記念入場券にも端的に示されている。

11） 本章以降の天皇の競馬行幸については、次の資料を参考にした（日本競馬史編纂委員会編 1967; 日本中央競馬会総務部調査課編 1968; 日本中央競馬会編 2005b; 日高・横田 1998; 日高 2005）。

12） 戸山学校競馬は共同競馬会社による開催の視点から見れば、同資料の共同競馬の節や立川（2008）にあるように、グラント将軍の歓待競馬を除いた明治 14 年（1881）5 月 29 日から明治 16 年（1883）11 月 17 日までの計 5 回である。それに対して上野不忍池競馬が計 3 回となる。また横浜根岸への行幸回数が 14 回となっているが、現行の競馬主催者による最新の研究ではテグナー（1970）の調査などに見られるように、13 回と規定されている（日高 2005）。その他に明治 26 年（1893）に陸軍乗馬学校で首取競馬が実施されたという記録も残されている（日本競馬史編纂委員会編 1967: 624–625）。

13） 服制の変化と近代天皇制を支えた華族階層の役割意識の違いについては刑部の分析が詳しい（刑部 2012）。

14） 内部的な意味においては近代的な君主像をアピールすることにあり、それはピラミッド型の中央集権国家を形成する機能を果たしていた。一方、外部的な意味においては近代国家としての日本、日本近代化の象徴としての天皇を諸外国にアピールし、条約改正の糸口とするための外交戦略の 1 つであった（日高・横田 1998: 70）。

15） 横浜では洋式競馬が導入された 1860 年代にすでに賭けは行われていた。当初はブックメーカー式の賭けや個人同士の賭けであったが、それがやがてロッテリー馬券（スウィープステークス式）などの馬券発売方法に変わった。こうした横浜の動向を真似てか、日本人主催による競馬場でも賭けは行なわれていた。しかし、これらは正式に認められたものではなく、個人間や私設馬券屋による賭けにすぎなかった（日高・横田 1998: 71）。

16） 戦前において天皇の馬、軍馬としての捉え方は武市（1999）や加藤（2017）などにも見られる。一方、筆者による「天皇の競走馬」としての概念は現在の日本中央競馬会による競馬事業においても有効な言葉である。

17） 明治 13 年（1880）から明治天皇による優勝賞品の下賜はあったが、根岸において対象となるレースは定まらなかった。

参考文献

秋永和彦（2004）『横浜ウマ物語 ── 文明開化の蹄音』神奈川新聞社

────（2012）『近代競馬 150 周年記念特別展示 日本近代競馬史展』馬事文化財団

────（2013）『日本ダービー80 回記念、東京競馬場開場 80 年記念 東京優駿・東京競馬場展』馬事文化財団

飛鳥井雅道（1989）『明治大帝』筑摩書房

馬の博物館編（1995）『根岸の森の物語 ── 競馬は横浜で生まれ育った』神奈川新聞社

────（2009）『特別展 横浜開港 150 周年記念 文明開化と近代競馬』馬事文化財団

大江志乃夫（2005）『明治馬券始末』紀伊國屋書店

刑部芳則（2012）『明治国家の服制と華族』吉川弘文館

笠原英彦（2006）『明治天皇 ── 苦悩する「理想的君主」』中央公論新社

加藤康男（2017）『靖国の軍馬 ── 戦場に散った 100 万頭』祥伝社

神崎宣武編（1994）『近代 ── 馬と日本史 4』〈「馬の文化叢書」第 5 巻〉馬事文化財団

キーン、D.（2001）『明治天皇（上・下）』角地幸男訳、新潮社
金栄作（1975）『韓末ナショナリズムの研究』東京大学出版会
多木浩二（1988）『天皇の肖像』岩波新書
武市銀治郎（1999）『富国強馬 ── ウマからみた近代日本』講談社選書メチエ
立川健治（2008）『文明開化に馬券は舞う ── 日本競馬の誕生』世識書房
テグナー、F.M.（1970）『日本レース・クラブ五十年史 ── 日本レース・クラブ小史』鈴木健夫訳、日本中央競馬会
長島信弘（1988）『競馬の人類学』岩波新書
日本ウマ科学会・ウマ用語集編集委員会編（2003）『ウマ用語集 2003』日本ウマ科学会
日本競馬史編纂委員会編（1966）『日本競馬史』第１巻、日本中央競馬会
────（1967）『日本競馬史』第２巻、日本中央競馬会
日本中央競馬会総務部調査課編（1968）『日本競馬史』第３巻、日本中央競馬会
────（1969）『日本競馬史』第４巻、日本中央競馬会
日本中央競馬会編（1976）『競馬百科』みんと社
────（2005a）『日本中央競馬会 50 年史』日本中央競馬会
────（2005b）『天皇賞競走 100 年の記録：1905-2005』日本中央競馬会
早坂昇治（1989）『文明開化うま物語 ── 根岸競馬と居留外国人』有鱗堂
原武史（2001）『可視化された帝国 ── 近代日本の行幸啓』みすず書房
日高嘉継・横田洋一（1998）『浮世絵 明治の競馬』小学館
日高嘉継（2005）『エンペラーズカップ 100 年記念 栄光の天皇賞展』馬事文化財団
フジタニ、T.（1994）『天皇のページェント ── 近代日本の歴史民俗誌から』米山リサ訳、日本放送出版協会
丸山真男（1961）『日本の思想』岩波新書
山岡荘八（1968）『明治天皇（全３巻）』講談社
吉川英治（1983）『草思堂随筆・折々の記』〈吉川英治全集 52〉講談社